

## チュニジアの民主化——歴史的過程と成功の要因



金沢大学名誉教授 鹿島正裕

1. 2011年にいくつかのアラブ諸国において民主化を求める民衆運動が続発し、

「アラブの春」と呼ばれましたが、チュニジアはその先陣を切り、結果的に唯一民主化に成功した国です。私は中東政治研究者として、1989年に初めて同国を訪れて以来関心を寄せていましたが、この動きを受けてチュニジア研究を再開し、昨年12月に4度目の訪問を行って現状視察も試みてきました。20近くあるアラブ諸国のほとんどが非民主主義国にとどまっている中で、なぜチュニジアだけが民主化できたのかについて、現段階の私見を簡単にお伝えしようと思います。



世界地図帳(平凡社、2005年)より引用

2. まず、ほとんどの日本人にとってなじみのないチュニジアとはどのような国か概説しますと、北アフリカの中央辺にあつて、地中海の対岸ではイタリアのシチリア島に近いです。人口は1150万人(2018推定)、一人当たりGDPは11,900ドル(購買力平価、2017推定)と、まだかなり貧しいです(天然資源にあまり恵まれておらず、軽工業や観光産業に依存しています)。歴史を振り返ると、ベルベル人の地だったのをフェニキア人のカルタゴが支配して地中海世界の覇権をローマと争いましたが、ローマに征服されてキリスト教が普及します。ついでアラブ人に征服されてイスラーム教が普及し、16世紀にはオスマン帝国の属領となりますが、マムルーク(スルタンによって派遣された奴隷軍人)出身のフセイン朝が内政の自治を得ていました。1883年にフランスの保護国とされますが、フセイン朝は存続します。フランス人官僚や他のヨーロッパ人を含む植民者によって近代化が進められますが、フランス語を話すようになったエリート層は現地人差別に不満を持ち、民主化運動を行って1956年に独立を獲得します。運動の指導者ブルギバは君主を追放し、自ら大統領となってチュニジアをフランス的な近代国家に発展させようとし、男女平等・共学等、ムスリム

国では先駆的な改革を行いました。反発するイスラーム主義者を弾圧し、独裁者化してゆきました。

3. では、なぜ、またどのように民主化革命が起きたのでしょうか。1987年、老衰しても終身大統領たらんとしたブルギバをベン・アリ首相が強制退任させ、後継者になります。民主化を約束しましたが、隣国アルジェリアでの内戦等を理由にイスラーム主義勢力の弾圧を再開し、自分も終身大統領を目指すようになります。一定の工業化や観光振興で経済成長を実現しますが、国営企業の民営化を利用して一族や側近による経済支配を広げました。人口中の青年層比率が高くて、職を得られぬ人が多く、貧富の格差や行政の腐敗に不満が高まっていました。そこで2010年末、内陸の小都市に始まった若者の抗議運動が、弾圧を機に2011年初には首都チュニス等にも広がり、大群衆が大統領辞任を要求します。大統領は軍隊を出動させようとしたが拒否され、妻とともにサウジアラビアに亡命します。2012年の制憲議会選挙を経て、イスラーム主義のナハダ（ルネッサンス）党と世俗主義の共和国会議党らの連立政権が発足し、新憲法制定を目指します。イスラーム過激派による政治家暗殺が続き、労働総同盟等4市民団体の調停もあって（その「カルテット」は翌年ノーベル平和賞を受賞）、ようやく自由主義的な新憲法案が合意されました。2014年末、総選挙で世俗主義の「チュニジアの呼びかけ党」が第1党となり、ナハダ党は第2党、共和国会議党は小党派に転落します。翌年、第1・第2党らで連立政権を作り、大統領にはかつて外相を務めた高齢のセブシが就任します。2016年、外国人観光客に対するイスラーム過激派のテロ（日本人も3名犠牲に）が続いたこともあって、観光産業の不振は長引いており、経済状況が革命前よりむしろ悪化したため、国民はデモやストで不満を表明しています。今年になって、呼びかけ党からシャヘド首相（40歳代半ばの農業専門家）派が分離して「チュニジア万歳党」を結成、呼びかけ党より多くの議員を擁し、連立政権はナハダ党と万歳党を中心とするものになりました。7月にセブシ大統領が92歳で死去したので近く新大統領の選挙が行われますし、年末に議会選挙も予定されています。

4. このように、革命後のチュニジアは、1989～90年に脱共産化した後の東欧諸国に似て新政治・経済体制の確立に苦闘していますが、独裁者を追放した他のアラブ諸国



テロ事件で日本人3名を含む外国人観光客等が犠牲になったバルドー博物館

でエジプトはまた軍部主導政権に逆戻りし、リビア・イエメンが内戦状況に陥っているのに比べれば、明らかに民主化に成功しています。それはなぜ可能となったのでしょうか？ 歴史的要因としては、①進歩的イスラームの伝統（スンニー派の4学派中穏健なマールク派であることと、スーフィズム[神秘主義]が根付いており比較的寛容)、②オスマン帝国下の改革（タンジマート[スルタンが導入した改革]を受けて1861年に憲法制定[1864年に棚上げ]）、③フランス支配下の近代化（近代的行政・教育機関、政党・労働組合の出現）、④ブルギバ政権下の革新（進歩的憲法・民法、世俗的司法・教育普及）等が挙げられます。革命時の状況的要因としては、①軍隊の政治不介入、②労働組合等の市民団体が活躍、③仏米の影響大（経済・文化・軍事面でも）、④イスラーム主義のナハダ党指導者にも西欧の影響が強い（西欧諸国に亡命していた人が多いため）等です。これらを考えると、同様の条件に恵まれているアラブ諸国はほとんどないので、近い将来に他のアラブ諸国がチュニジアにならって民主化することは期待し難いようです。

#### 参考文献

鹿島正裕「チュニジアの民主化はなぜ成功したか」『放送大学研究年報』34号 2016年  
([http://lib.ouj.ac.jp/nenpou/no34/34\\_10.pdf](http://lib.ouj.ac.jp/nenpou/no34/34_10.pdf))

(一般社団法人「e教育サロン」機関誌『チョウゲンボウ』第40号掲載稿)